



土の流れるのを防ぐ目的で始めた草生が地力の増進に大きく役立つたことでありました。草生を始めたときは草そのものは大した害もないだろうという考えでやつたのでありましたが、三年くらいたつてこれを打返すと、はつきり樹勢が良くなり果実の肥大も目立つてよくなつたことでありました。傾斜地のクロバーも良く育たないような悪い土壌でも草生をやつて三、四年もしたならば平坦地に劣らないくらいの収量を上げることができるのであります。

私はりんご園の草生の中に桃、梨を少しづつ植えて三年になりますが、今のところでは別段何等の差も認められません。果樹園の大部分はどこでも傾斜地が多いが、草生をやつたら必ず効果があると思います。

その後全園を草生にしたのですが、クロバーなら千二、三百貫、オーチャードグラスなら二千貫から三千貫くらいはできるのであります。それでこの草を土壌にやる前になにか利用する方法がないかと考え、昭和二十五年に仔牛一頭三万五千円で導入したのであります。もちろん地力の増進が目的であつたのでございましたが、それと同時に牛乳を飲みながら働くという食生活の改善も大きいねらいであつたのであります。

牛を飼つて見たところ一頭飼つても二、三頭くらい飼つてもそう手数が変わらないということだつたので、翌年練習用として乳の出ている親牛を一頭十五万円で購入し、合わせて二頭、その後これから三頭生まれ現在五頭になつております。

ただいまの状況から見ますと、りんご園の草生で牛一頭に対して夏の期間半年間だけならば二、三反もあれば十分で、冬の飼

料及び敷草を入れても六反から七反くらいもあつたら十分だろうと思われれます。ただ草を飼料として利用する場合いろいろの種類の草を作るということが必要で、いくらい草でもそれだけ与えておきますとあきて来る。したがって乳量も減つて来るものです。それで赤クロバー、ホワイトクロバー、ラデノクロバー、オーチャードグラス等組合せた方がいいと思つております。来年はよもぎの草生もやつて見たいと思つております。最も合理的にやるにはりんご園三反歩にいろいろの草を蒔き、普通畑一反くらいにデントコーンを作り、これをエンシレイジにするのが良いようで、私もいま千七百貫入れのサイロ三基造つたところでございます。なおりんごの徒長枝等は非常に良い飼料でありまして好んで食べるもので、したがって乳量も増えるのであります。ちようど十月の中頃になりまして草も伸びなくなりまして、不要の徒長枝を切り取り牛に与えながらりんごの着色を促進させることになつております。

それから草を飼料として利用する場合の薬剤の關係でありまして、初め私もこの点を一番心配したのでございましたが、これまで五年間実際にやつてみてホリドル以外のものであつたら撒布後すぐに与えても何等の心配もないと自信を深めていたのであります。ただホリドルでありますら撒布後二週間以上は必要なようで、十五日目に与えたら異状はなかつたが一週間目くらいでは中毒症状が見られたのであります。それでなるべくホリドルは使わないようにいたしております。馬は牛より弱いとのことでありますので二十日くらいは必要でないかと思われれます。

草生をやつて何か困つたことがないかとよく聞かれるのであります。別に困つたということはありません。強いて言えば薬剤撒布の時ホースがひつからまるくらいのもので困つたという程のことはないのでございます。なお早魃の時水分の競争のため、ところによつてはいくらか悪影響もあるようですが、これもとても上手な蒔き方、刈り取りによつて防ぐことができるのであります。

それから酪農を加えたら相当大きい労力が必要ではないかといわれませんが、搾乳時間一頭当り一回に二十分もあればできるもので案外特別の労力はかからないものです。有袋栽培の労力、清耕栽培の労力に比較するならば実に問題外でありまして、特に一カ年の半分を雪の中で暮す私の地方の農業経営では労力を有効に利用することと、年間を通じて現金収入があることになりまして、農家経済も安定させるに非常に役立つのであります。

りんご園に草生をやることによつて酪農ができたのであります。牛を飼うことによつて大量の厩肥ができました、これで私のりんご園は非常に肥沃化されます。この樹勢はますます充実して来ております。無袋栽培におけるサビ果の問題、天候不順による葉害の問題もこれによつてよほど解決ができるし、生産費低減の近道はここにあるといよいよ自信を深めているのであります。なおまた米食にだけに依存する農村の食生活の問題も容易に転換でき、大いに改善されたのであります。私のところで昨年牛乳八石の自家消費でありましたが今年は一割方多くなるはずでございます。したがつて米食の方は多少減ることになるのであ

ります。

牛のことだけ申し上げたのであります。しかし私は決してチチ屋ではありません。安いらんごを作るためにその基盤となるべき土壌の肥沃化と食生活の改善をねらつたのであります。したがつて今後乳価が下つたといつたとしても牛をやめることはないのであります。どこまでも安いらんごを作るためのりんごの中の酪農という考えでやつているのであります。

最初の目標であつた凶作からのがれる農業経営は一応できたのであります。今後の目標といつたしましては、草生栽培を継続いたしましてこれに成牛五頭を結びつけ、年間一万三千貫以上の厩肥によつてりんご園の肥料費を現在の三分の一くらいに節減できる見込みで、そして毎年反当二百五十箱から三百箱くらいのりんごの生産を確保いたしたいと思つております。一方、牛の方も年間百五十石くらいの牛乳と四、五頭の仔牛が出るようになります。

この目標達成のためには、後二年くらいを要する見込みであります。そうならば朝八時から午後四時頃までの軽い労働で済むように計画しているのでございます。ただこの夢を実現させたいためにいまのところは、より一層の努力を必要としております。ただ夜間だけは如何に忙しいときでも働かない方針でありまして、それで特に倉庫や荷造場には電燈をつけないようにいたしているのであります。できるだけ重労働にならない農業経営という方針でやつているのであります。

(なお同氏は県りんご協会立木品評会第一期(三年間実績)紅玉で一等、第二期園光で一等に入賞している)